

山本亭とその時代

文・写真 小池和栄



かつしか P P クラブ

山本亭とその時代

目次

| | | | | | | | |
|------|-------------|---|---|---|---|---|----|
| I. | 山本亭をご存知ですか？ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 3 |
| II. | 主を偲ぶ たたずまい | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 5 |
| III. | 関東大震災と葛飾 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 7 |
| IV. | 特産のレンガと瓦 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 8 |
| V. | 世界に知られた庭 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 10 |
| VI. | 柴又からの発信 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 11 |
| VII. | 山本氏についての後日譚 | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | 15 |

（表紙の写真）

時代劇に登場する武家屋敷の長屋門を、洋風にアレンジしたデザインは、当時、異彩を放つたことだろう。

今見ても斬新である。門から玄関に至る植栽や建物など、かつて、そこに暮らした人の財力と人柄が偲ばれる。

写真撮影・小池和栄 平成23年3月20日

I. 山本亭をどこ存知ですか？

一般的に葛飾柴又での名所は、「帝釈天」（日蓮宗・経栄山題経寺）、「矢切の渡し」、そして「山本亭」の順になる。

「山本亭」は、見事な伝統的書院庭園と、大正ロマンを感じる和洋折衷の建物でありながら、いま一つ知名度が低い。庭園の広さは約890㎡、建物1階が約400㎡、一部二階と土蔵と、別棟の茶室からなっている。



大正末期から当地の資産家、山本栄之助氏の邸宅である。山本氏は、「山本工場」というカメラ部品工場の経営者だったという。戦前の経営者とは云え、失礼ながら、世に知られた大企業でもない。近代実業家人名辞典等にも名前は見当たらない

(写真・春の陽ざしを浴びた亭内)

麴町（千代田区）でもなく、松涛（渋谷区）でもない当時の下町は、長屋、借家、が当たり前の時代に、どうして葛飾に？と、疑問を抱くのが普通であろう。

贅を尽くした豪邸に住む為には、会社が好調でなければならぬ。たぶん経営手腕に優れ、税制も今より緩やかな、良き時代だったのだろうなどと、勝手に想像した。

山本邸は、栄之助氏から4代が暮らし、昭和63年に区が取得、「山本亭」と改め平成3年から一般公開となった。



平成12年には、葛飾区の有形文化財に指定されている。

（写真・かつての正面玄関）

II. 主を偲ぶ たたずまい

現在の山本亭の入館口は、帝釈天に近い北側にある。昔の正門は、反対の南に面した高さ約2mの塀に囲まれ、洋風にアレンジした長屋門は見事である。

「洗い出し」のレンガ風仕上げは、木造には見えない。

門の左右にある袖部屋は、大理石やステンドグラスが使われ、門番や来客の付き人、車夫の控室になっている。玄関脇の応接間は邸内唯一の洋間で、漆喰の高い天井、寄木モザイク模様の床、マントルピースなど、昭和初期の上流社会の雰囲気漂わす。

家を取り巻く廊下の天井は数奇屋風で、木製のガラス戸や「ガラス欄間」で自然光を入れている。



(写真・袖部屋のステンドグラス窓)



(写真・欄間とレトロな電灯の笠が懐かしい)

庭に面した各部屋は、主の性格かほとんど壁は無く、開放的である。

各部屋から廊下越しに見る庭園は、縁先に池泉を巡らし、築山と約400本の植え込みで、遠近・濃淡をつけ、滝の音を響かせた書院庭園である。

Ⅲ・ 関東大震災と葛飾

今年の3月11日、三陸沖を震源とする東日本大地震は、マグニチュード9.0と世界最大級であった。

規模は関東大震災を凌ぎ、津波による未曾有の被害が痛ましい。

今から88年前の、大正12年9月1日に発生した関東大震災は、死者、行方不明者約10万5000人、焼失家屋4万7128戸に及んだ。とりわけ、東京下町の被害は大きく、

当時、浅草小島町一丁目に工場が在った山本栄之助氏は、壊滅的打撃を受け、一代で築いた富を失ったという。

浅草に嫌気がさした山本氏は、工場と自宅を柴又に移す決意をしたらしい。工場は、今の「寅さん記念館」辺りに、従業員食堂は「川甚」の近くにあったという。

(写真・都内でも稀な個人の書院庭園)



拙宅（高砂）近くにはいくつも寺院が在る。

いづれも、関東大震災後、浅草から移転してきたと聞いた。

震災に懲りた人々は、繁華な浅草に比べ、牧歌的な柴又や高砂は、安心して暮らせる土地と映ったのだらう。

IV、特産のレンガと瓦

荒川と江戸川に挟まれた葛飾は、粘土が容易に採れたのか、水運の利便さからか、江戸時代より農家の副業として、「瓦」や「朝顔鉢」（今戸焼）などが造られていたらしい。

8

余談ながら、明治5年、日本で最初の洋式レンガ製造所が、小菅に建設されたのもこれと無縁ではない。

銀座や新橋の洋風建築、道路に使用されたおびただしい数量のレンガは、小菅で窯かれたものであった。

当時の東京府志料にも、「金町瓦」の名で売られた記録がある。おりしも発生した、関東大震災で木造瓦葺の家屋は倒壊、文字通り首都圏の「瓦解」で人々は家を失い、建物の下敷きとなり、その後の火災で多くの人が命を落した。

これを期に、建築資材として瓦屋根の危険性が叫ばれ始めたという。当時、柴又で「瓦」を製造していた鈴木某の生産にも、少なからぬ影響が及んだと思われる。

浅草を捨てる決意をした山本氏、瓦製造の将来に不安を感じた鈴木氏との思いが一致し、今日の山本亭一帯を取得した経緯があるという。



(写真・かつての金町ブランドか?)

V. 世界に知られた庭

アメリカに、日本庭園の美しさを伝える専門誌の「JOGJ」(Journal of Japanese Garden)がある。

1998年に創刊され、世界の英語圏37カ国で発行され人気が高い。同誌は毎年、優れた日本庭園の番付を発表している。

この中に2008年、山本亭が第4位にランクされている。

たまたま、その翌年に足立美術館を訪れた時に知り、あの山本亭が？と驚いた。

地元の間人が知らないことを恥じながら、一方で区民税を払う一人として誇らしくもあつた。



(写真・ゆるやかに時を刻む庭)

因みに、第1位は足立美術館（島根県）で今日まで、その地位は不動である。2位は桂離宮（京都府）、3位は養浩館（福井県）、5位は無鄰菴（京都府）と天下の名園が続く。

基準は、大自然との融合や、建物との調和、限られた空間の見せ方、利用者への対応など一様ではない。

山本亭の評価は、堅苦しくない個人庭園として、多忙な現代人が暫し畳に寝転び、癒される庭であるという。

名だたる京都の庭園を押さえ、東京にも安田庭園（墨田区）、徳富（蘇峰）邸（世田谷区）など、元は個人庭園であるのに外人の目は鋭い。

VI. 柴又からの発信

緋毛氈の廊下を歩くと微かな音がする。エプロンの女性に聞くと「さあく？相当古いですからネ」の返事がであった。

何回も往復してみたが、どう考えても「きしみ」とは違う。

再度、別の女性に伺うと、にこやかに「間違いないく鶯張りです。積極的に言っていませんが、当時の建築技術の粋を集め、高級材料を使用したと聞いておりま

す」との答えが返ってきた。この女性は吉田和嘉子さんと云い、区の指定管理制度直後から施設の責任者で、裏千家の先生でもある。前各項までの記述の多くは、吉田さんから取材である。



(写真・鶯張りの廊下と数奇屋天井)

先日、区の紹介でアメリカ・ルイジアナ州から、4人の女性が訪れ、お点前の手ほどきをしたという。なぜ、こんな狭い入口（躡口Ⅱにじりぐち）から入るの？

どうして、お辞儀ばかりするの？など、外人らしい質問があったと面白い話をして下さった。

普段でも、館内では抹茶サービスも受けられるが、「桜」「菖蒲」「菊」の季節にお茶会が催されるといふ。

吉田さんは、これらを取り仕切る他、亭内で定期的にお茶席でのマナー教室を開催しているという。



(写真・茶室前にある満開の馬酔木)

世代も時代も変わり、「私」から「公」へ立ち位置を替えた「山本亭」ではあるが、庭園も建物も昔のままである。

JOJGのランクも区民はあまり知らないし、それ以外の人となると、ほとんど知られていないのが実情だろう。

柴又のもつ雰囲気や下町原風景は、歴史的価値を残す山本亭の魅力と、相容れない気がしないでもない。

しかし、葛飾区は寅さんの取り持つ縁で、オーストリアのウィーンと友好都市を結んでいる。

寅さんは永遠に旅から戻らないが、世界に通用する文化遺産と、柴又の魅力を、これまで以上に積極的に、内外へ発信する必要がある。

VII・山本氏についての後日譚

その後も金町中央図書館で、山本栄之助氏に関する資料を探したが見つからない。レファレンス・カウンターに相談したが不明であった。担当の清水さんは、「少し時間を貰えれば調べてみます」と、おっしゃり数日後電話を頂いた。

区史にも見当たらないが、インターネットの「アナスチグマツトレンズ」に、山本氏の記述があるという。

氏は1914年(大正3年)、東京市浅草区で金属加工会社を設立。大正12年の関東大震災後、葛飾に工場(六櫻社シャッター製造)を移したという。

早速、パソコンを開くと、山本氏と合資会社山本工場、「六櫻社」についての記載があった。

これによると、六櫻社は、コニカ(コニカミノルタ)の前身であり、国産の小型カメラ「ベビーパール」のシリーズで、一世を風靡したらしい。



(写真・防空壕跡)

それまで国産カメラの本体は、木箱に皮を張っただけの簡単なものであった。第一次世界大戦で、ドイツから光学機器の輸入が止まり、金属カメラの開発に迫られたという。

当時のカメラは、ボディ・レンズ・シャッターと分業で、下請の部品工場はそれぞれ経営者の名前で、「〇〇工場」と呼ばれていた。

大正末期、海軍は光学兵器強化の為、六櫻社に軍用カメラ（写真銃）の製造を命じた。その後、陸軍からも射撃訓練用カメラの受注を受け、技術力を高め規模を拡大していった。

昭和に入って、大型シャッターは六櫻社本社工場（淀橋）で、小型シャッターは山本工場で製造され、性能が優れていたらしい。



（白の漆喰が映える土蔵）

山本亭内には、外壁を分厚く塗った大壁造りの土蔵と、敷地内に防空壕がある。普段、防空壕は一般公開しないが、最近まで、終戦記念日や子供の社会科見学に開放されていた。

壕内は6畳2間ほどの広さで、シャワー室、大型金庫などあつて、入り口からは想像できない広さだという。

これらは、山本工場が単なる町工場ではなく、軍と密接に関係し、高度の技術力で軍用光学機器の生産に携わっていたことが窺える。

山本氏の財力は、これに裏付けられたものではなかったろうか。関東大震災の教訓から堅牢な土蔵で火に備えた。

工業地帯から離れ緑濃い柴又での本格的な防空壕、全てが一本の線で繋がったような気がした。

